

第2章 バブル時代 “黄金時代” 1985年～

オーケストラを設立したら、まず考えなくてはいけないのが楽器と演奏会です。バイオリンを始めたばかりの生徒たちだけのオーケストラですが、当時の私が一番知っていて目標としていたオーケストラは「ウィーンフィルハーモニー」だけでした。知らないと言うことは恐ろしいですね。初演奏会の指揮者は当然プロでと考えて、ウィーンで友人であった小原全氏（玉川学園創設者小原罔芳の孫）にお願いしました。最初の練習に彼が太田市に来た時に当時1億円もするフェラーリで太田市にやって来て、レストランで夕食の後にお酒を飲んでいたので、代行をお願いしたら代行の方が「この車は運転できません」と嘆いていたのが思い出します。彼は現在もブラジルやロシアなど世界中のプロオーケストラを指揮しています。

演奏会の後に今後のオーケストラの活動について相談をすると、彼から「一般の人にも理解されるような目標を持って活動する事が大事」だと言われて、ちょうどNHKテレビで話題になっていた「**第九を歌おう**」

の事を話すと「それでもいいんじゃないか」とアドバイスをもらって、第九の演奏の難しさを理解していなかった私は、翌日には都内の楽譜専門会社に電話を入れて発注しました。確か費用は10万円ほどでした。

そして演奏に必要なティンパニーやコントラファゴットなどの高額な楽器をどの様に購入するかをゴルフで知り合った、地元の政治家秘書に相談したところ、大正6年（1917年）に中島飛行機会社（現富士重工業）の創業者で軍需大臣も務めた地元の名士中島知久平の息子が衆議院議員の中島源太郎先生を紹介して頂きました。

中島先生は慶応大学の付属幼稚園時代からピアノに親しまれて、少しは音楽の素養があったので、私が東京の自宅を訪ねると非常に喜んで下さり、二つ返事で団長を引き受けて頂きました。その時の条件が同じ地元出身で自治省事務次官を退任したばかりの石原信雄氏を団の相談役にしたいとの事でした。この人事が数か月後にオーケストラに大きな収穫をもたらす事になりました。1985年の竹下内閣に於いて**中島先生が文部大臣**に、**石原氏が内閣官房副長官**として入閣が決まり、私たちの団から2人も入閣者が出てしまい世間では大騒ぎとなりました。おかげであつという間にご祝儀相場もあつて数千万円ものオーケストラ支援金が集まり、

この費用で第九演奏に必要な楽器や楽譜類を全て揃えることが出来ました。この期間に私は首相官邸に2度、文部大臣室にも1度呼ばれて行きました。文部省の事務次官ともやりあつてしまい、中島大臣に「私は文部省の事はよくわからないので事務次官に従ってください」と窘められました。その事務次官も1か月後には収賄で逮捕されてしまい全国ニュースで見えて驚きましたが、複雑な心境でした。

1986 年秋には、日本の国連加盟 40 周年の記念事業が日生劇場で開催されて、政治的な動きがあったのかもしれませんが、平日にもかかわらず私たちのオーケストラが招待されて 100 名近くの子供たちが学校を公欠で休み演奏に参加しました。各国の大使に混ざり、来賓として第 3 次中曽根内閣の中曽根首相、美智子妃殿下が来場下さりました。2 人とも群馬県に所縁のある方です。司会は榊原郁恵さんで挨拶をしたら身長が低いので驚きました。楽屋に入る時に、一人一人の持ち物検査が厳しくて子供たちの楽器も全て開けられていました。子供たちや引率した保護者達は初めての東京での大舞台に大変満足した様子でした。

1988 年太田市制 40 周年では太田市から演奏会に特別な予算が付き、また元文部大臣が来賓として来場され満席に近い会場で第九演奏会を太田市民会館で無事に全楽章を演奏する事が出来ました。第九の合唱団は 2 年前から練習を開始しましたが、当時の太田市内で活動している合唱団に第九演奏の依頼に出向くと「私たちは群馬交響楽団と第九を演奏するのでアマチュアの演奏には参加できないし、まして子供たちのオーケストラとなんかと歌えない」と言われてしまいました。自分たちのレベルも考えないでよくそんなことが言えるなどは思いましたが、オーケストラの保護者を中心に合唱希望者を募り、私がドイツ語の発音を指導したりで子供たちと保護者の両方を指導する毎日でした。また弦楽器の指導は群馬交響楽団の方たちは「私たちも弾けないのに初心者の子供たちが弾けるわけがない」と最初から断られてしまい、私は意地になって東京から音大生たちを呼び寄せて我が家に宿泊させて練習に明け暮れていました。本番には合唱団の人数がもっと欲しいと指揮者からの要望で埼玉県の第九合唱団をバス 2 台で参加してもらいました。この大事業も心無い県内の音楽家からは「ベートーベンを侮辱している」と面と向かって言われて啞然としました。

第 3 章 海外交流 "アメリカ公演" 1989 年～

第九演奏会を企画している時点で、音楽界や一部の政治世界では、私たちの計画が話題になっていた様で各方面からのアプローチがありました。中でも政治家たちが海外へ出かける時のご用達の旅行専門会社の 1 つがキャピタル東急ホテルに有り、その社長さんと息が合って以後 2000 年のカーネギーホール公演までいろいろとお世話になりました。しかし 1989 年当時は、まだまだ子供たちが海外へ出かけるのは大変珍しく農協のおじさんたちが団体旅行で欧米に出かける程度でした。そこで 1 年前の第九演奏会後に通訳の牧師と保護者代表と旅行先の太田市の国際姉妹バーバンク市・ロサンゼルス州（ローキード本社・デイズニー本社）とミシガン州フリント市（100 年以上の歴史がある私立音楽学校）に視察に出かけました。

バーバンク市は、戦時中に世界 1 のロッキード社と世界第 2 の中島飛行機会社との縁で

国際姉妹都市が結ばれたそうですが、オーケストラはなく、地元のアマチュア合唱団が共演する事になりました。フリント市は私の希望で、通訳の牧師さんが直接アメリカに電話をかけて訪問を伝えただけでしたので、最初は冷たい反応でしたが、持参した第九演奏会のビデオを見せて一緒に第九演奏の提案をした所態度が大きく変わりました。以後彼らの交流先のパリの青少年オーケストラを紹介してもらいパリ公演も3度行い、2000年にはカーネギーホール公演も実現する事になりました。

この視察旅行ではフリント市の視察の後に、牧師さんが予定にないスコットランドの青少年オーケストラ訪問を提案して来て、ミシガン、ニューヨークからロンドン、スコットランドと飛び、まさに飛び込みでグラスゴーのスコットランド青少年オーケストラの事務局に十数時間かけて行きました。事務局長のチェスター氏は急な訪問にもかかわらず、ホームステイを提案してくれて、夕方には500年前には家畜小屋だったと言う石作の家に我々を連れて行き、「夕食前にゴルフ、水泳、テニスのどれをやりたいか？」と聞かれて流石に長旅で疲れているのでテニスでお願いしました。6月のスコットランドの夜は11時過ぎまで明るくて驚きました。後に知ったのですが、彼は英国のプリンスと寄宿舎学校で知り合いの仲で、元BBCスコットランド交響楽団のフルート奏者でした。数年後に来日した時、女王からの手紙を持参して皇居を訪ねました。

1989年の日本はバブル時代でもありましたが、アメリカ公演の為の正月特別合宿を伊勢崎市の青少年育成センターで開催しました。そこに飛び込んできたのが昭和天皇崩御のニュースでした。指導にはアメリカ公演で指揮者を務める堤俊作氏（平成天皇の学生時代からのオーケストラ指導者）が初めて指揮に参加されて、指導者陣はとても緊張した思い出があります。演奏のバランスで、ビオラとコントラバスが足りないと言うことでアメリカ公演には桐朋学園の学生を数名同行することになりました。コンサートマスターには戸澤哲夫君（当時前橋高校2年・後に芸大・大学院・東京シティフィルハーモニーオーケストラ、コンサートマスター）が、担当して同じく芸大附属高校2年に在学していた岸川由起子（ファゴット・芸大卒業後に南西ドイツ交響楽団）も参加していました。この合宿に参加したメンバーの多くは1期生であり、合唱団や同行者を入れて180人の大所帯の演奏旅行となり、バブル時代の思い出として記憶される出来事でした。